

## 静岡・駿府城三の丸跡

弥生時代中期・後期、古墳時代初頭の集落跡が発見されている。今回

の調査では、新たに古墳時代後期、平安時代後期の遺構が検出され、時期により集落の位置が変わっていることが判明した。木簡が

- 1 所在地 静岡市追手町
- 2 調査期間 一九八六年（昭61）一月～二月、七月～一月
- 3 発掘機関 静岡県教育委員会
- 4 調査担当者 山下晃・黒田勝久・村上誠一・羽一生 保
- 5 遺跡の種類 集落跡・城跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代後期、奈良時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

駿府城跡は賤機山東南の安倍川扇状地の扇央部に立地している。この地域は、賤機山によって北西の風がさえぎられ、安倍川の水害

に対しても比較的安全で、

静岡平野の中でも最適な生

活環境を形成している。今

回調査した部分は、駿府城

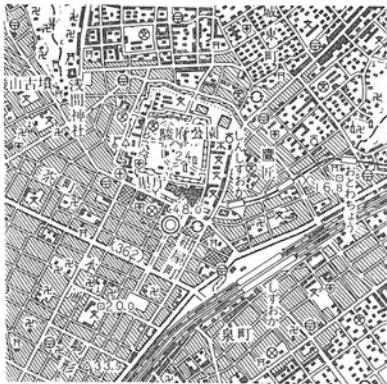
の三の丸で江戸時代には城

代屋敷が置かれていた部分

である。付近からは、今川

氏館と思われる跡や、駿府

城に関わる遺構はもとより、



(静岡)

路跡からは漆塗椀、陶磁器、かわらけ、木製品等が多く出土し、それらの遺物は一六～一七世紀に比定できる。土壌からは大量の木製品、植物遺存体と共に、漆塗椀、瀬戸・美濃産の鉄釉皿、唐錢・北宋錢等が出土し、時期は一六世紀後半に比定できそうである。

- 8 木簡の积文・内容

(1)

• 「

×十九

八九

〔八  
カ〕

〔八  
カ〕

〔八  
カ〕

〔八  
カ〕

〔鬼  
カ〕

〔鬼  
カ〕

〔竈  
カ〕

〔竈  
カ〕

□

□

(198)×45×3 019

(192)×37×3 081

103×20×4 032

106×21×5 011



(3)

木簡は合計五点出土し、(1)と(2)が流路跡から、他は土壌から出土した。(1)は木簡の中央部に文字が書かれているが、ほとんど消えてしまっている。文字が書かれていた部分は他の部分より腐蝕が遅れるようで、若干浮き上がっており、今後判読可能かもしれない。性格としては(2)とともに呪符木簡と思われる。

(3)の第一字は「鯖カ」としたが、あるいは鰯の可能性もある。用途としては荷札であろう。

(4)の「筑後様」の上の二文字が判読できない。したがって人物の比定はできないが、共伴遺物から一六世紀後半に位置づけられ、今川氏に関係する人物の可能性が高い。

五点目の木簡は墨痕は認められるが判読不能であった。

9 関係文献  
静岡県教育委員会『駿府城跡内埋蔵文化財発掘調査報告書』(一九八七年)

八三年)

同『駿府城三の丸跡発掘調査報告書』(一九八七年)

(羽二生保)

一九七七年以前出土の木簡(四)

平城宮跡(第二三二次・第二七次・第二八次・第二九次)

呪符木簡の系譜

木簡と上代文学——水産物付札をめぐって——  
「漆紙文書」出土概要

彙報

頒価 三五〇〇円 ￥四〇〇円

## 木簡研究第四号

卷頭言——木簡保存法の思い出——

一九八一年出土の木簡

坪井清足

概要 平城宮跡 奈良女子大学構内遺跡 法隆寺 藤原宮跡 長

岡京跡 三条西殿跡 鳥羽離宮跡 若江遺跡 佐堂遺跡 大阪城

三の丸(大手口)遺跡 小曾根遺跡 尾張国府跡 下津城跡 坂

尻遺跡 小川城跡 恒川遺跡 三ツ寺Ⅱ遺跡 下野国府跡 多賀

城跡 郡山遺跡 胆沢城跡 道伝遺跡 笹原遺跡 明成寺遺跡

安田遺跡 大森鐘島遺跡 高堂遺跡 漆町遺跡(C地区) 南吉

田葛山遺跡 百間川遺跡群(原尾島遺跡) 草戸千軒町遺跡 道

照遺跡 長門国分寺跡 野田地区遺跡 湯川神社境内遺跡 大宰

府跡(大楠地区) 九州大学(筑紫地区) 構内遺跡 長野遺跡

辻田西遺跡

一九七七年以前出土の木簡(四)

平城宮跡(第二三二次・第二七次・第二八次・第二九次)

呪符木簡の系譜

木簡と上代文学——水産物付札をめぐって——  
「漆紙文書」出土概要

彙報